

「豊太郎が手記を書いた理由」

はじめに、私がこのテーマを設定したのは、豊太郎のはらわたが1日に9回転するほどの苦しみを負わせた「人知らぬ恨み」をわざわざ思い出すような回想の形で手記に著した事に疑問を持ったからだ。

このテーマの結論としては、豊太郎は罪の意識から逃れようと相沢へ罪をなすりつけるためにこの手記を書いたのである。

しかし、私は豊太郎が手記を書き始めた動機は、本文に「我と我が心さへ変わりやすき」とあるように、最初は「人知らぬ恨み」が変わりやすい心によってなくならないように書き記しておこうという軽い気持ちで手記を書き始めたのではないかと思う。しかし、書き進めていくうちに、豊太郎はエリスを失ったのは自分の弱い心が原因であるという事に気付く。本文に、「我が脳中にはただただ我を許すべからぬ罪人なりと思う心のみ満ち満ちたりき」とあるように、この時点で自分は罪人であるという事を認識している。しかし、豊太郎はその罪を相沢という友人になすりつけてしまうのである。豊太郎がこういう行動をとるきっかけとなったのは、相沢がエリスに豊太郎が帰国するという事実を伝え、エリスをパラノイアにした事だ。ここで、エリスが真実を知ったのが豊太郎の口からではなく相沢からというのが重要である。豊太郎が寝込んでいたときに相沢が尋ねてこなかったとしたら、豊太郎自身がエリスに真実を伝え、エリスは豊太郎の裏切りを知りパラノイアになっていただろう。つまり、どちらがエリスへ真実を告げても、豊太郎がエリスを裏切ったという事に変わりはなくエリスはパラノイアになったと思う。結果的に、豊太郎が裏切ってるという事実は変わらないが、相沢の口からエリスへ真実を告げたという事で、豊太郎はエリスを狂わす原因を相沢にあるとして、罪をなすりつけるきっかけにしたのである。

ではなぜ豊太郎は相沢へ罪をかぶせようとしたのだろうか。これには豊太郎の性格が関係している。

豊太郎は本文に、「余が幼き頃より～縛せしのみ」とあるように「まことの我」は弱い心を持っていて、この心が原因で受動的・器械的な人間にならざるを得なかったとして、弱い心のせいにしている。しかし、この弱い心からエリート人生を歩む事になり、豊太郎は自信と決断力を持つこととなった。これは本文にも、「我が有為の人物なることを疑わず。また我が心のよく耐えんことをも深く信じたりき」とある。しかし、この自信と決断力は「決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず」とあることから、逆境のときにはないのである。つまり、豊太郎は自分に不利な状況には、自信も決断力もなくなり、弱い心があるだけの人間になる。伯からの帰国の誘いを承諾した事を「ああ、なんらの特操なき心ぞ。「承りはべり。」と答えたるは」と後悔しているが、実は、自分が帰国したい気持ちを弱い心のせいにして隠しているだけなのではないだろうか。本当にエリスを愛していたのなら、パラノイアになっても「薬を。薬を。」と自分のお腹の中の子供を心配しているエリスを置いて、帰国したりしないはずだ。だから、豊太郎は、自分が罪人であるという不利な状況から逃げるために、逃げるのは弱い心のせいだとして、相沢に罪をかぶせ、文章の終わりを「されど我が脳裏に1点の彼を憎む心今日ま

でも残れりけり」と締めくくった。これは結局すべて相沢が悪いのだと強調しているのである。

したがって、豊太郎は自分の弱い心や、自分の代わりに相沢がエリスに帰国する事を告げた事を利用して自分が罪人であるという事を認識しているのにもかかわらず、罪の意識から逃れるために相沢へ罪をなすりつけようとしてこの手記を書いたのである。

このテーマを解決していくうえで、解決できなかった事は、豊太郎にとってエリスや相沢は何だったのだろうかという事だ。自分の弱い心や相沢を利用してまで豊太郎はいったい何をしていたのだろうか。エリスと生まれてくる子供を置いて帰国してしまう豊太郎の行動には驚いた。そして、ひどい人間だと思った。最初はただの優柔不断な男にしか見えなかったけれど、実際は弱い心の裏にもっといろいろな策略がある人間のような気がする。